

# 最適性理論と学習英文法

## — 否定のサイクルをめぐる —

### Optimality Theory and Pedagogical Grammar for English Learners: The Case of Jespersen's Cycle of Negation

大野真機

OHNO Masaki

#### 抄録

学習英文法では英語学習上の効率と効果が最大限に配慮されていることから、主に規範的な表現の扱いが中心となり、また説明のための道具立ても限定されてしまっている。一方、学習英文法で「非標準」あるいは「非文法的」として排除される表現の中には、地域や共同体、年齢層などによっては「容認可能」と判断され、実際にはインフォーマルな場面で使用されているものが少なくない。学習英文法の中身は更新されることがないことから、かつては容認されていなかったものの、その使用が英語母語話者たちのなかで徐々に広がりを見せている表現については、「間違った」判断をしてしまうことがあるのだ。また学習英文法はその目的のために、システムとして説明・記述のための一貫した道具立てを欠いていることから、言語現象によってはその取り扱いについて複数の相反する分析を提示することがあり、一定の習熟に達した（教師を含む）英語学習者に混乱を引き起こしている。こうした問題は、学習者にとって英語という言語のさらなる深い理解を妨げる要因となっている。その根本の原因は、学習英文法が言語理論と有機的に結びついておらず、すでに完成し閉じた体系となってしまっていることにある。よって、学習英文法に言語学の知見をそのまま「下ろす」のではなく、国内の英語教育環境を考慮し、また言語理論とも接続する新たなレベルの英文法が必要とされている。本論文は、通例否定文で使われる表現が意味の変更を伴わずに否定辞脱落の形式でも使われる現象を取り上げ（e.g., I don't know beans about it. "I don't know anything about it" = I know beans about it. (Huddleston and Pullum 2002: 823)), 最適性理論の基本的な概念を導入し、否定のサイクル（Jespersen 1917）の問題として捉えることで、当該事例や類似の現象は「制約の優先順位の違い」として説明できることを示す。そして言語理論の適切な適用範囲を見極め、言語理論は英語学習にどのような形でどの程度に歩み寄り、貢献できるのかを考察する。

**キーワード：**最適性理論、学習英文法、否定のサイクル、忠実性制約、有標性制約、  
(not) know beans

## 1. はじめに

学習英文法には教育的妥当性(柳瀬 2012)を満たすことが求められていることから、その特徴として、「主に規範的な表現の扱いが中心となっている」ことが挙げられる。しかしながら学習英文法で「非標準」あるいは「非文法的」として排除される表現の中には、地域や共同体、年齢層などによっては「容認可能」と判断され、実際にはインフォーマルな場面で使用されているものが少なくない。学習英文法の中身は更新されることがないことから、かつては容認されていなかったものの、その使用が英語母語話者たちのなかで徐々に広がりを見せている表現については、「間違っただけ」判断をしてしまうことがある。例えば *regardless* という語について、学習英文法ではそれが *regardless of* の形を取って後続に *whether* を取ることが述べられているが、実際には *regardless whether* の形式も無視できない程度に使用の広がりを見せていることが指摘されている (Garner 2016, Liberman 2012a, b)。こうした状況は、学習者にとって英語という言語のさらなる深い理解を妨げる要因となっている。その根本の原因は、学習英文法が言語理論と有機的に結びついておらず、すでに完成し閉じた体系となってしまうことにある。よって、学習英文法に言語学の知見をそのまま「下ろす」のではなく、国内の英語学習環境を考慮し、また言語理論とも接続する新たなレベルの英文法の基礎論構築が必要とされている。

本論文は、通例否定文で使われる表現が否定の意味はそのままに否定辞脱落の形式でも使用される現象を取り上げる (e.g., *I don't know beans about it. "I don't know anything about it" = I know beans about it.* (Huddleston and Pullum 2002: 823))。当該事象を「否定のサイクル」(Jespersen 1917) の問題として捉え、また最適性理論の基本的な道具立てを用いることで、「制約の優先順位の違い」として説明できることを示す。そして言語理論の適切な適用範囲を見極め、言語理論は英語学習にどのような形でどの程度に歩み寄り、貢献できるのかを考察する。

## 2. Huddleston and Pullum (2002)

多くのアメリカ英語話者のあいだでは、通例否定文で使われるはずの表現が、否定の意味は保持したままに肯定形でも使用されることが Huddleston and Pullum (2002) で報告されている。

### (1) Huddleston and Pullum (2002: 823)

For many American speakers the expression *I couldn't care less* has lost its negation and the expression is now *I could care less*, still with the idiomatic meaning "I do not care at all". For these speakers, *care less* is no longer an NPI; *could care less* has become an idiom with a negative meaning (approximately the opposite of its literal meaning). This is not an uncommon development; it is seen again in the development from *I don't know beans about it* "I don't know anything about it" to *I know beans about it* with the same meaning.

*I couldn't care less.* がなぜ「ちっとも気にしない」の意になるのかについて、渡辺他 [編] (1976) は『この表現は必ず相手が何か話題を持ち出して、その反応を聞かれた場合

に用いられる』と述べ、次のようなステップで説明を試みる。

(2) 渡辺他 [編] (1976: 1047)

1. 語句を補い、I couldn't care less about it than I can now.という文を設定する。
2. これにより、「私が気にかけるとしても今私がそれに気にかけているほど少なく、気にかけることはできないだろう」という直訳が引き出される。
3. そこから「それこそ気にかけることの最低線で、それ以下はできない」→「もっとも気にかけていない」と解釈を辿る。
4. 文脈に応じて「そんなことには関心ない」「ちっともかまわない」となる。

I couldn't care less. の意味が上述のように引き出されるとすると、not を伴わない I could care less. がなぜ同じ意味内容を伝えるのかが問題となる。なお、こうした現象は決して珍しいものではないとして、Huddleston and Pullum は類例として not know beans/know beans (「何も知らない」) を挙げる。

同じような振る舞いは、一般には taboo terms と見なされる語句を含むときに観察される傾向があることも指摘されている。Postal (2004) は次の例を挙げ、“[...] they illustrate forms that occur in a fixed position where the presence versus absence of an *overt negation* seems to make no semantic difference.” (Postal 2004: 161) と述べる。

(3) Postal (2004: 161)

- a. Claudia saw squat/dick. (squat/dick = nothing)
- b. Claudia didn't see squat/dick. (squat/dick = anything)

こうした否定表現の脱落現象は、「否定のサイクル」(「イエスペルセン・サイクル」とも)と関連付けて議論されることも多い (e.g. Breitbarth et al. (eds.) 2013, 2020, van Gelderen (ed.) 2009, 2016, Horn 1989, 2001, Israel 2011, Lawler 1974, Liberman 2004)。

(4) 否定のサイクル (Breitbarth et al. (eds.) 2013)

	stage I	stage II	stage III	stage III'
English	ic ne secge (Old English)	I ne seye not (Middle English)	I say not (Early Modern English)	I don't say (Present-day English)
French	jeo ne dis (Old French)	je ne dis pas (Middle and Modern written French)	je dis pas (Colloquial French)	

通常、否定のサイクルの Stage I とは動詞の左側に否定要素が位置している状態を指す。Stage II とはその否定の力が弱まり、それを補強すべく動詞の右側に「一粒 (も～ない)」や「一滴 (も～ない)」などを表す要素 (intensifier) が現れる段階のことをいう。例えばフランス語の pas は、元々は 'step' を表していた。この intensifier としての原義の意味が

薄れそれ自体が否定の力を持つようになると、動詞の左側にある本来の否定要素に取って代わりようになり、intensifierは単独で動詞の右側に現れ否定を伝達する役割を担うようになる。この段階を Stage III という。

### 3. 最適性理論によるアプローチ

ここでは、not know beansを具体的事例として取り上げる。まず初めに、de Swart (2010)で提案されている2つの制約を概観し、「何も知らない」を表すインプットからは(通常は)アウトプットとしてnot know beansの形式しか選ばれず、know beansは排除されることを確認する。そしてknow beansの使用実態を説明するには、2つの制約のあいだにある優先順位に変更を加えることを提案する。

#### 3.1 de Swart (2010)

まず、意味と形式の対応を次のように設定する。なお(6a)の形式は否定のサイクルの Stage IIに、(6b)は Stage IIIに対応しているものとする<sup>1</sup>。

- (5) 意味 ( $\neg P$ ): “I don’t know anything about it.”  
 (6) a. 形式 ( $\neg S$ ): I don’t know beans about it. (Stage II)  
 b. 形式 (S): I know beans about it. (Stage III)

最適性理論の枠組みで提案されている制約のなかに、忠実性制約 (faithfulness constraint) というものがある。これは、当該事例に当てはめて考えると、インプットの情報 (=意味論における否定) がアウトプット (=形態統語論) にも必ず反映されることを要求する制約である。de Swartはそれを次のように規定する。

- (7) FNEG (de Swart 2010: 77)

Be faithful to negation, i.e. reflect the nonaffirmative nature of the input in the output.

(7) は概略、「意味論に存在するNegは、統語論にも存在しなければならない」ことを述べている。入力にNegがあれば、出力にもNegがあることを要求するのだ。

最適性理論ではまた、有標性制約 (markedness constraint) という種類の制約も仮定されている。言語表現において否定を表すには、(肯定を表すときには必要のない) 特別な要

1 否定のサイクルは元来通時的な概念であるが、言語によっては共時的にも生じていることが知られている。Schwenter (2005) は、ブラジルポルトガル語では次の3つの形式が可能であり、(ia-c)はそれぞれ否定のサイクルのステージ1-3に相当すると述べる (*não*が否定を表す)。

(i) Brazilian Portuguese (Schwenter 2005: 1249)

a. A Cláudia *não* veio à festa.

b. A Cláudia *não* veio à festa *não*.

c. A Cláudia veio à festa *não*.

All meaning ‘Cláudia didn’t come to the party.’

本論文では、現代英語でも方言によっては表現のなかに共時的かつ部分的に否定のサイクル現象が起こっていると仮定する。

素が必要である。どの言語であっても、肯定文に否定辞を加えることで命題の否定が表されるのであって、その逆（つまり否定文が基底にあって、否定辞を削除することで肯定命題が表されるの）ではない。この点を考慮し、de Swartは次の有標性制約を提案する。これは、出力に否定辞が含まれていないことを要求する制約である。

(8) \*NEG (de Swart 2010: 78)

Avoid negation in the output.

de Swartは、\*NEGは統語論および意味論の両方に課される制約として提案し、否定は形式および意味の両方において有標なものだと主張する。そしてFNEG >> \*NEGの順序付けられたランキングを提案し、どの言語においても通常は $\neg P$ の入力と $\neg S$ の出力は常に対応していることを捉える。

(9) <表1> 通常の否定文の場合 (de Swart 2010: 78を一部改変)

意味(入力)	形式(出力)	FNEG	*NEG
$\neg P$			
	S	*	
$\Rightarrow$	not S		*

表1で、入力となる $\neg P$ が出力先でSとして現れると、それは入力に存在する $\neg$ が出力に反映されていないという点で、FNEGに違反する。一方、Sという出力には否定が含まれていないので、Sは\*NEGを満たす。反対に、出力がnot Sの形式で現れると、FNEGは満たすが\*NEGには違反する。Sとnot Sは、ともに制約の違反を1つずつ犯している。しかしFNEG >> \*NEGの制約のランキングに照らすと、より深刻な制約の違反を犯しているのはSのほうである。したがって、Sという出力（言い換えると、否定表現を伴わずに否定内容を伝達する言語表現）は排除され、not Sが選ばれる。当該事例に当てはめると、(5)の入力（“not know anything”）からは、(6a)の出力（not know beans）しか選ばれず、(6b)のknow beansは排除される。

3.2 know beansの持つ「何も知らない」はどのように引き出されるのか

FNEG >> \*NEGについて、de Swartは“As far as I have been able to determine, there are no languages in which \*NEG outranks FNEG. The ranking is universal, because FNEG >> \*NEG is an evolutionary stable equilibrium of the linguistic system.” (de Swart 2012: 79) と述べる。しかしながら、know beansが表す振る舞いとは、 $\neg P$ の入力からSが出力されている状態だと読み替えることもできる。そこでFNEG >> \*NEGは絶対的なものでなく、特定の表現においては\*NEG >> FNEGも許されていると考えることでknow beans (= “not know anything”)を取り扱うことを提案したい。

## (10) &lt;表2&gt; know beans の場合

意味(入力)	形式(出力)	*NEG	FNEG
$\neg P$			
$\Rightarrow$	S		*
	not S	*	

入力となる  $\neg P$  から S が出力されると、それは  $\neg$  が出力に反映されていないという点で、FNEG に違反する。しかしながら S は、not を出力に含んでいないという点で、よりランキングの高い \*NEG は満たしている。not S はこの \*NEG に違反をしてしまっている理由で排除され、S の形式が選ばれる。当該事例に当てはめて考えると、know beans が “not know anything” を表すのは、それが競合する形式 (not know beans) に比べて制約違反の深刻さの度合いが低いことに由来するといえる<sup>2</sup>。

## 4. 終わりに

ある種の言語表現は、否定辞の脱落した形式のままでも否定を伝達し続けることができる。そのような振る舞いを見せる言語表現は、否定のサイクルの Stage II と III のあいだで揺れていると理解することができる。そうした言語形式の揺れを捉えるために、本論文では de Swart (2010) で提案されている FNEG  $\gg$  \*NEG に変更を加えることを提案した。具体的には、アメリカ英語のある種の表現では FNEG と \*NEG の順序付けに揺れが生じており、両者はより高いランキングを求めてお互いに競合している状態にあることを主張した。

know beans や could care less といった表現は、学習英文法では「非標準」あるいは「非文法的」として排除される可能性の高いものである。しかしその使用実態は、思われているほど低いものではない。言語学的な観点から否定辞脱落現象について考えると、これは言語の多様性と変化・変異に焦点を当てる重要なトピックであるとわかる。通常、学習英文法は（静的な体系としての）標準英語に焦点を当て、言語変化・変異や言語変種については説明のための道具立てを持たない。しかしながら昨今の World Englishes の考えを尊重す

2 S の形式で  $\neg P$  を表わず know beans に否定表現が含まれていない。一方、否定のサイクルのステージ3の形式には否定表現が含まれている（フランス語の pas など）。本論文で提案している \*NEG  $\gg$  FNEG と、de Swart (2012: 107) が否定のサイクルのステージ3を説明するものとして提案する制約のランキング (FOCUSLAST, \*NEG  $\gg$  NEGFIRST) とでは、説明目的が異なる。前者は（否定辞脱落による）「肯定形」でなぜ否定内容を伝えることができるのかを説明し、後者はなぜ動詞の左側に位置する本来の否定辞が脱落し、否定を伝える役割が右側の（否定の力を持つようになった）要素に取って代わられるのかを説明しようとする。not know beans の beans は単独ではまだ否定表現として定着しておらず、特定の文脈 (know に後続する位置など) において否定の力を持つことが可能な表現であると考えられる。本論文は、当該および類似の事例がなぜ否定辞の脱落を起こすのかについては、その理由を「(ある種の) 否定のサイクルを起こしている」ことに求め、なぜ否定辞脱落の形式で否定内容を表せるのかについては、\*NEG  $\gg$  FNEG を提案する。なお、なぜ特定の表現にだけ当該の否定辞脱落現象が見られるのかについては、現段階では明確な答えを持ち合わせていない。傾向として、そうした表現は「通常は否定環境で用いられる」ものであり、そこにはある種の否定極性表現が含まれていることが挙げられる。その発生は個別の表現については一般的に予測が難しいが、現象は偶発的なエラーでなく、言語使用の背後にある確率的なプロセスに基づいている可能性を探る方向で調査を続けたい。



る機運の高まりは、新しいアプローチにより修正・発展した、時代のニーズに合致する新しい学習英文法が求められていることを示唆している。

従来の学習英文法は、(標準からは外れる)言語変化・変異を規範からの逸脱として「誤り」だと判断してきた。しかし実際には、逸脱には一定の許容幅がある。否定辞脱落という形態を否定のサイクルのひとつのステージに位置付けられるのであれば、現代英語の否定辞脱落現象は通時的観点からは十分に許容される範囲の規範からの逸脱であると考えられる。

文法の規則に違反する形式は、一律に非文法的として自動的に排除されるものではない。「文法的な形式とはランキング上位の制約を満たす最適解である」という最適性理論の考え方を導入することで、従来の学習英文法では対処できなかった「文法性の持つ連続的段階性」を捉えることができる。これにより、変種がどのように形成され、発展し、変化するのかに関する枠組みの提供が可能となる。本論文では、言語理論(ここでは最適性理論)はこのような形で World Englishes 時代の英語学習者のニーズに応え、英語学習に貢献できる可能性を示した。

#### 【謝辞】

2名の査読者から貴重なご指摘とご助言をいただき、論文の内容を向上させることができました。感謝申し上げます。

#### 【参考文献】

- Breitbarth, Anne, Christopher Lucas and David Willis (eds.) (2013) *The history of negation in the languages of Europe and the Mediterranean: Volume I: Case studies*. Oxford: Oxford University Press.
- Breitbarth, Anne, Christopher Lucas and David Willis (eds.) (2020) *The history of negation in the languages of Europe and the Mediterranean: Volume II: Patterns and processes*. Oxford: Oxford University Press.
- Garner, Bryan (2016) *Garner's modern English usage*. Oxford: Oxford University Press.
- van Gelderen, Elly (ed.) (2009) *Cyclical change*. Amsterdam: John Benjamins.
- van Gelderen, Elly (ed.) (2016) *Cyclical change continued*. Amsterdam: John Benjamins.
- Horn, Laurence (1989) *A natural history of negation*. Chicago: University of Chicago Press.
- Horn, Laurence (2001) "Flaubert triggers, squattive negation, and other quirks of grammar," In Hoeksema et al. (eds.), *Perspectives on negation and polarity items*, 173-202. Amsterdam: John Benjamins.
- Huddleston, Rodney, and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge grammar of the English language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Israel, Michael (2011) *The grammar of polarity: Pragmatics, sensitivity, and the logic of scales*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jespersen, Otto (1917) *Negation in English and other languages*. Copenhagen: A. F. Høst.

- Lawler, John (1974) “Ample negatives,” *Chicago Linguistic Society* 10, 357-377.
- Lieberman, Mark (2004) “Most of the people in the world could care less,” *Language Log*, June 16, 2004. Online: <http://itre.cis.upenn.edu/~myl/languagelog/archives/001209.html>
- Lieberman, Mark (2012a) “Regardless (of) whether,” *Language Log*, December 7, 2012. Online: <https://languagelog.ldc.upenn.edu/nll/?p=4358>
- Lieberman, Mark (2012b) “Regardless whether prudes will sneer,” *Language Log*, December 10, 2012. Online: <https://languagelog.ldc.upenn.edu/nll/?p=4361>
- Postal, Paul (2004) “The structure of one type of American English vulgar minimizer,” In Postal (ed.), *Skeptical linguistic essays*. Oxford: Oxford University Press.
- Schwenter, Scott (2005) “The pragmatics of negation in Brazilian Portuguese,” *Lingua* 115, 1427-1456.
- de Swart, Henriette (2010) *Expression and interpretation of negation: An OT typology*. Dordrecht: Springer.
- 渡辺登士、福村虎治郎、河上道生、小西友七 [編] (1976) 『続・英語語法大辞典』、東京：大修館。
- 柳瀬陽介 (2012) 「コミュニケーション能力と学習英文法」、大津由紀雄 [編] (2012) 『学習英文法を見直したい』、東京：研究社。

Received : September, 30, 2023

Revision received : November, 8, 2023

Accepted : November, 29, 2023